

義経はなぜ弓を拾うのか

神戸女学院大学非常勤講師 東野泰子 ひがしの やすこ

一 弓矢の名手

現代の我々が使うことばに「矢継ぎ早」というのがある。難しいことばではないので、ふだんは深く考えずに使っているが、これは文字通り「矢を次々に素早くつがえる」ということで、そもそもは軍記物語に見られる表現である。

競はもとよりすぐれたるつよ弓・精兵、矢つぎばやの手きき、大ぢからの剛の物、「廿四さいたる矢でまづ廿四人は射殺されなんぞ。おとなせそ」とて、向ふ物こそなかりけれ。

（平家物語四・競）

渡辺（源）競は以仁王を奉じて挙兵した源頼政の郎党である。強弓（強く張った弓を引けること）のうえ、矢継ぎ早に射ることができ、二十四本の矢で、きつと二十四人を射てしまうという。「矢継ぎ早」という表現から、マシガンのような

うに次々と放たれる矢が目に見えかぶ。

渡辺競は速射の名人だが、軍記物語には様々なタイプの弓矢の名人が描かれている。なかでも有名なのは、頼朝・義経の叔父にあたる源為朝であろう。

其長七尺ばかり也。生付きたる弓取なれば、矢つか、ゆんでのかるな四寸まさりて長し。是によりて矢つかを引事十八束、弓の長は八尺五寸、ふとさはなが持枋の如し。

（保元物語上・新院御所各門々固メノ事）

身長が七尺（約二メートル）、右腕より左腕が長く、十八束（約一二メートル）の長さの矢を引くことができた。矢の長さの標準は十二束（約八十四センチ）であるから、一・五倍である。用いる弓も八尺五寸（約二・五メートル）の長さで枋（長持ちのかつぎ棒）のように太いというから恐ろしい。その一矢で鎧武者二人を射通したという。これがどの程度史実を反映しているのかわからないが、保

二 小兵であった与一と義経

弓矢の名手は、おおむね為朝のように怪力の大男として描かれる。いっぽう、那須与一は小兵（小柄）であった。

小兵といふぢやう、十二束三伏、弓は強し。

（平家物語十一・那須与一）

強弓ではあっても小柄なため、用いる矢の長さは標準的で、競や為朝のような屈強なものではない。しかし「扇の的」の場面が必要とされたのは一発必中の的中力である。与一は飛ぶ鳥を狙って「三に二は必ず射落とす」腕前であった。また、沖に平家、陸に源氏が対峙するなかでの最初の一矢は、勝敗の行方を占う神聖な意味合いをもっていた。勇猛

な武将ではなく、二十歳ばかりとまだ若く、小柄な与一がこの役目を担うことで、場面の神聖さと悲壮さが強調されている。

源義経もまた小柄であり、しかも強弓ではなかった。そのことは「弓流」の段によつて、平家物語読者には明らかになる。けれども、当時、平家方の武士たちが義経の体格・容貌をよく知らなかったことに注意しなければならない。壇浦合戦のおり、平家方で義経の容貌を知る武者が、「義経は色白で背が小さく、前歯が出てゐる」と味方に説明して、義経を探させている。また平教経も、立派な鎧甲を目印に義経を探している。メディアのない当時は敵の体格・容貌を知るすべなどなかったのである。

義経が弓といはば、二人しても張り、もしは三人しても張り、叔父の為朝が弓のやうならば、わざとも落として取らすべし。庭弱たる弓を、敵の取り持つて、「これこそ源氏の大将九郎義経が弓よ。」とて、嘲嗟せんずるが口惜しければ、命にかへて取るぞかし。

（平家物語十一・弓流）

三 装束描写の重要性

義経の弓が敵の手に渡れば、源氏軍の大将が小兵で非力だということの動かぬ証拠になる。敵の知り得ていない秘密を知られてしまうことになる。それは義経の名を汚すのみならず、平家軍を増長させ、戦を不利にするかもしれない。だからこそ、義経は危険をかえりみず、戦の最中に海に流してしまった弓を拾わなければならなかった。

平家物語では武者の弓矢や刀、身に着けている鎧甲が詳しく描写されている。それらがその人物の身分・年齢・腕力などの人となりを表すからである。お互い見知らぬ敵味方は身に着けるものを見て相手を判断していた。現代の読者である我々も、装束に注目して平家物語の登場人物たちをイメージしてみると、それぞれの特徴がより鮮明になるだろう。

那須与一は、濃紺染の生地で襟と袖に赤い錦で縁取りをした直垂に萌黄威（明るい緑色のひもで鎧の板を綴り合わせた

もの）の鎧である。十七歳で討たれた平敦盛は、白絹地に鶴の刺繍の直垂で萌黄匂（萌黄のグラデーション）の鎧である。若武者は萌黄の鎧であることが多い。七十歳を過ぎて戦をした源頼政は白絹の直垂に紺地に白く草模様を染めた皮で威した鎧の上品ないで立ち。平家方で剛の者といわれた平忠度は紺地の錦の直垂に黒の鎧というダークな色合いで力強さを感じさせる。

また、旭將軍といわれた源義仲の最期の装束は、赤地の錦の直垂に唐綾威の鎧、屋島合戦での源義経は、赤地の錦の直垂に紫裾濃（紫のグラデーション）の鎧である。錦は格の高い武士のためのもので、特に赤地のものは大将が身に着けることが多く、ぜいたくで華やかなものであったのだろう。

現代においても、忍者赤影、ウルトラマン、戦隊ものの○○レンジャーのリーダー、ガンダムのような専用ザクなど、ヒーローの色は赤であることが多く、この話題は生徒の興味を喚起できるのではないだろうか。

東野泰子

大阪府生まれ。論文に『奥義抄』から『僻案抄』へ「そが菊」注にみる院政期歌学の一様相」（『国語国文』）など。共著書に『八雲御抄の研究 正義部作法部（片桐洋一編）和泉書院』、『宴曲索引』（伊藤正義監修、和泉書院）などがある。